

「怨望の人間に害あるを論ず」(「学問のすゝめ」より)

「凡(およ)そ人間に不徳の箇条多しと雖(いえ)ども、その交際に害あるものは怨望(えんぼう)より大なるはなし。」
福沢 諭吉

冒頭の一節は、福沢諭吉の「学問のすゝめ」(岩波文庫)十三編の冒頭に記載されているものです。僭越ながら、私なりに解釈させていただくと「概して人間には、徳のないところが数多くあるけれども、(中でも)人と人との交際に害のあるものは、(他人を)ねたみ、そねむことより大きいものはない」といった趣旨と思われま

す。また、福沢は、その理由について、次のように語っています。「怨望は働きの陰なるものにて、進んで取ることなく、他の有様に由って我に不平を抱き、我を顧みずして他人に多を求め、その不平を満足せしむるの術は、我を益する非ずして他人を損ずるに在り。譬(たと)えば他人の幸と我の不幸とを比較して、我に不足するところあれば、我有様を進めて満足するの法を求めずして、却って他人を不幸に陥れ、他人の有様を下(くだ)して、もって彼我(ひが)の平均をなさんと欲するが如し。いわゆるこれを悪(にく)んでその死を欲するとはこの事なり。故(ゆえ)にこの輩の不平を満足せしむれば、世上一般の幸福をば損ずるのみにて少しも益するところあるべからず。」

これも私なりに解釈させていただくと次のような趣旨と思われま

す。「ねたみやそねみ(といった感情)の働きの陰のような(暗い)もので、前向きに何かを行うようなことはなく、(幸せそうな)他人の状況を理由として、自らの状況等に不平を持ち、自分を顧みることなく、(その不平の原因などの)多くを他人に求め、自分の不平を満足させる方法は、自分の利益になることをするのではなく、他人を傷つけるところにある。(「論語」にもあるが、)例えば、他人の幸福と自分の不幸とを比較して、自分に不足する所があれば、(その状況を改善し、)満足する方法を求めず、却って他人を不幸に陥れ、他人の状況を悪くすることで、他人と自分のバランスをとろうとしているようなものであり、いわゆる(他人への)憎しみのあまりその死を望むというのはまさにこのことである。したがって、こうした人達の不平を満足させようとするれば、世間一般の幸福を損傷するだけで、少しも(世間にとって)利益となるところは、あるはずがないのである。」

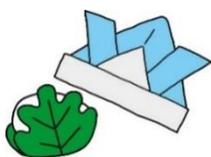
ここでご紹介した「学問のすゝめ」が書かれたのは、明治5(1872)年から同9(1876)年までとされていますので、今から約150年前のことになりますが、この間のテクノロジーの発展等に比べ、人々の意識や感情等にはあまり進歩が見られないようで、「怨望」の持つ害悪は今も変わらず、むしろ SNS 等ネット上における他者への「誹謗中傷」が新たな社会問題ともなっています。

福沢が懸念していた人間の「業」ともいえる「怨望」の害については、我が身を顧みても、この感情が全くないかと言え

ば正直否定することは難しいところですが、少なくともそうした感情を他者に言動として向けることは、厳に慎むべきであると思います。また、高度情報化社会と言われる今日、福沢の指摘のように、根本的には、こうした感情が自分にとっても負のもので、自己の成長の糧にもならないものであることを、我々一人ひとりが受け止め、考えていくことがあらためて求められているのではないのでしょうか。

(敬称略)

令和6(2024)年5月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理事長 松井 聡 明